

地域資源を活かした農ガールファッションの 商品開発とサービスデザイン

－ アグリアート・フェスティバル 2014 「大地の心をきく」を事例として －

Development of Farmers' Clothing for Girls Working in Agriculture
- A case study of the Agri-Arts Festival 2014: "Daichi no Kokoro o Kiku" -

水谷由美子 * 甲斐少夜子 ** 小田玲子 ***
Yumiko MIZUTANI Sayoko KAI Reiko ODA

キーワード：服飾デザイン 農作業着 もんぺ モンペッコ 地域資源 農業振興 サービスデザイン

Keywords: clothing design; farmers' clothing; "Mompe mompekko"; regional resources; development of agriculture service design

This article focuses on the development of farmers' clothing for "Noh - Girl" (young women who work in agriculture) using regional resources and applying service design methodology. These activities are intended to contribute to the development of agriculture in Japan. We report here on a case study of a fashion show, the Agri-Arts Festival 2014: "Daichi no Kokoro o Kiku". The project has been planned jointly by Ms Akie Abe (wife of Prime Minister Shinzo Abe), Shoko Otani (Vice President of the Association for Development of Japonisme), and Yumiko Mizutani (Professor and Dean of the Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University). The main purpose of the study is to investigate the development of the 2014 version of 'mompekko', a style of pants originally created in 2013. First, a new material called 'Yamaguchi-shima raita2014' was created, and then from this material we developed new mompekko and 'salopekko' (salopette - a type of overall).

はじめに

本研究創作はテーマ「地域資源を活かした農ガールファッションの商品開発とサービスデザイン」に関して「アグリアート・フェスティバル 2014 - 大地の心をきく -」を事例としたものである。昨年実施した「農業スタイルコレクション 2013 in 長門油谷 with 会津若松^(注1)」を継続し、新たにモンペッコの商品開発を目指した。最近興隆してきたデザイン手法であるサービスデザインを応用しユーザーの体験価値を創造することを目的とした商品開発を行った。

若い女性が農業をする時に着る服がないということや農業への興味関心を持ってもらうために、服装とい

うスタイルから入ろうという考えで、安倍昭恵内閣総理大臣安倍晋三夫人と筆者の企画デザイン研究室が共同で2013年春から研究開発を始めた。昭恵夫人は2013年モデルのプロトタイプ最初の着用者である。発表時に同席した人たちから非常に好評だったため、スタイリングやコンセプトをそのまま進めた。

2013年モデルの素材は、最初は明るいイメージがよいと考え、かつてマリメッコ本社（ヘルシンキ）から提供されたウニッコ柄のテキスタイルで制作した。しかし、これは個性が強く、また地域資源を活かす発想とは異なるので、伝統的な地域資源として柳井織、玖珂縮み、そして昭恵夫人の発案でコラボレーション

* 山口県立大学大学院国際文化学研究所教授

** *** 山口県立大学大学院国際文化学研究所1年

をした会津若松市を代表する会津木綿に注目した。

次に筆者のアイデアでモンベッコ・グローバルというコンセプトを提案し、山口県に縁のある世界の国々のテキスタイルを、県下あるいは世界に出かけてテキスタイルを調達し使用した。特に、パリのインテリアファブリックの大胆な模様や、ガーナ周辺で流行しかつ製造されているワックスプリントなどは、伝統的な日本の緋や縞織とは異なった新しい印象を与えるもので、若者に人気であった。また、実際の田園での農作業時には、自然の風景とは色彩的に対照的であり、それがかえって新鮮な印象を与え、多くの方に好評であった。

そこで、本年は2014年モデルのモンベッコを作成するために、2013年モデルをサンプルに用いて、2つの方法で調査・研究を行った。1つは実際にデザインする研究室のメンバーが2013年モデルのモンベッコを履いて農作業をすることで、機能性や自然の風景との親和性および美的な側面について検証する方法である。また、他方はサービスデザインの方法を用いて、昨年のもんべっこを検証し、デザイン提案を行う方法である。

2014年モデルの目的は少量でもよいので本格的に商品化することが目指されたことと、有限会社ナルナセバと当研究室のサテライト研究室が共同でレーベルとしてmompekkoを立ち上げて、実際に農業女子に販売し普及を実現させることである。

以下ではまず研究創作の概要と方法を述べる。

1 研究創作の概要

まず、実践的な事例として、山口市内にある「一般社団法人おんなたちの古民家」の要請を受けたこともあり、フィールドワークを通して、デザインの情報収集を行った。具体的には山口市徳佐で5月に実施された田植えフェスティバルにモンベッコを着用して参加するのみならず、地域の人々や地域外から集まった若者に着用を依頼し、実際の着用によるモニタリングを行った。また、9月に長門市主催で実施された稲刈りにも同様に参加して、モンベッコをアピールするとともに、地域の人々の意見を聞く機会を得た。

さらに農林水産省経営局就農・女性課からのアプローチを得て、「農業女子プロジェクト^(注2)」と連携することになった。農業女子プロジェクトの事務局担当者との連携により、その後、山口県内の農業女子との出会いや全国で登録された農業女子とのコミュニケーション、さらに、作品の出品やメディアでの取り上

げなど、モンベッコ現象が社会的な広がりを得た。

全国（北海道、岩手、福島、茨城、群馬、埼玉、長野、愛知、滋賀、三重、岡山、福岡の各県）16名の農業女子に登録されている女性たちから新しいモンベッコのパターン、ポケットの機能などいくつかのチェックポイントにおいて、意見を聞く事ができたことは有意義であった。具体的な方法として、生地は異なるが同じパターンのモンベッコをそれぞれの農業女子に送り、アンケート調査を行った。そして農業女子が自分でモンベッコを穿いた写真を撮り、それを研究室に送るという方法で、視覚的資料を得た。これらの写真はショーの演出で発表された。ただし、今回、筆者の研究室が取り組んだのは稲作で、ここでモニターとなった農業女子の扱っているものは、多くが野菜や果物など畑作農業だった。ここではポケットなどに求められる機能が稲作と畑作とは異なっていることが理解できた。

またサービスデザインについては、筆者の研究室では2013年度からサービスデザインの思考や手法を用いて、服飾デザインのコンセプトに反映させる方法を用い始めている。サービスデザインの手法を、服飾デザインに応用する方法は、まだ世界でも事例が少ない。筆者は、本学との国際共同研究を実施しているフィンランド国立ラップランド大学芸術デザイン学部においてサービスデザインの先行例と出会い、マルヤッタ・ヘイッキラ＝ラスタス教授とサービスデザインの研究においても共同研究を開始した。ラップランド大学ではユニークな方法として、SINCO(Service Innovation Corner)^(注3) という装置あるいは空間を作り、ここにおける視聴覚装置を用いて、プロトタイプングを行っている。

山口県立大学では2013年春に学際的なサービスデザインに関する研究チームが結成されて、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」に研究テーマが採択された。この研究チームはライフイノベーション研究チームという名称で、大学COC事業の共生研究を行ってきている。主にここでは医療や福祉の領域での研究創作を行っている^(注4)。

2013年11月に学術交流提携校であるフィンランド国立ラップランド大学を訪問し、SINCOについての学習を行った。このシステムを参考にすでにサービスデザインの研究を行っている慶応義塾大学武山政直教授および大日本印刷株式会社サービスデザインラボの指導を受けて、本学仕様の視聴覚装置SPS（サービスデザインプロトタイプングシステム以下はSPSと記

す)を作った。モンペッコデザインのためのSPSを用いたロールプレイングは、ワークショップ形式で行う当研究チームの最初のデザインシミュレーションである。

ここでこの研究は山口県立大学国際共同研究およびライフイノベーション研究チーム^(注5)の研究活動の一部に関わっているもので、実際のロールプレイングにおいては研究室の学部生^(注6)も参加していることを記しておく。

実際の新しいパターンの検証については、久留米絨の製造地域の企業との連携により、伝統的なモンペの製造のコンセプトや形、縫製の特徴などを改めて情報収集した。本年の作品発表の機会として、アグリアート・フェスティバル2014を10月に実施することを企画し、その日程に向けて研究開発を行った。

今年の重要な目的は、上記したように新しいデザイン手法としてサービスデザインを服飾デザインに適応させることと、実際のものとしては昨年発表したモンペッコを検証し、商品開発としてmompekkolレーベルの元でモンペッコを販売実験ができることまでもっていくことである。なぜなら、本来の目的は若者が実際に着られるような農作業着を普及させることにあるため、提案だけでは人々が実際に農作業で着ることができないからである。

さらに、本年はサロベットタイプのコレクションのプロトタイプも開発することを目指した。昨年の発表以来、現場の農業者や若者で農業に携わっている女性の意見を取り入れ、サロベットあるいはツナギタイプの作業着も求められていた。本年はその中でまずはサロベットタイプのモンペッコに焦点を当て、プロトタイプを制作することとした。

その結果、当研究室のサテライト研究室が設置されている有限会社ナルナセバとともに、1つのレーベルとしてmompekkolを立ち上げ、農作業着の商品開発を行ったので、この点についても検証を行う。

以下では、実際に商品化されたレーベルmompekkolにおけるモンペッコとサロベッコと名付けたサロベット、さらに地域資源を新たに発掘して制作したプロトタイプについて、その研究プロセスや結果を踏まえ、それらの検証を行う。特に今回の大きな取組みはレーベルを作り、商品化を視野に入れ量産化をすることである。商品開発の場合には、デザイン上の美的側面や機能的な課題を解決するばかりでなく、適正な価格も大きな課題となる。そこで1つの解決策として、機械織の新しい地域資源を目指すためにオリジナルな素材

を作ることにした。

山口県の伝統的な柳井縞は、かつては農作業着などとして使われていた綿布であるが、現在は手染めおよび手織りであるために希少価値があるとともに高級な生地となっている。部分使いとしてデザインに取り上げているものの、その生地を全体に使うパンツを商品化することはコストの面で困難である。それ故に、地域で再興されて織られている伝統的な柳井縞の生地はオーダーシステムで扱うこととし、高級ゾーンのターゲットとした。

今回、オリジナルにデザインされた縞模様の広幅の布は新しい山口の伝統になることを願って、「やまぐち縞」と名付け、フィンランド語の縞を意味するraitaを個別の布名とした。以下では生地の開発について述べる。

2 地域資源から着想された新素材「やまぐち縞raita2014」の開発

筆者は研究室の研究創作の主なコンセプトとして、地域資源の発掘と創造さらに発信をキーワードにして、活動をしている。自然、歴史、人物、さらに伝統工芸などの文化、産業に光を当て、現代生活にそれらが活かされることを目的に、商品開発や文化イベントの服装などを手がけている。その中の1つに柳井縞がある。

ここでやまぐち縞を開発するに到った背景としての今までの取組みについて述べる。柳井縞の織物がかつて柳井周辺地域を含めた地域産業であったが、現在では伝統的手工芸の領域で柳井縞の会が中心となって織っている。筆者は2003年に柳井縞の会が制作している柳井縞を使った「復興10周年記念ファッションショー」の企画・演出・運営を依頼されたことがきっかけで、柳井縞と出会った。それ以来、現在まで手法は異なるものの、柳井縞を使った服飾デザインを行ってきた。

次に取り組んだ地域資源としては、柳井市に隣接し現在は岩国市に合併された玖珂地域で歴史的に織られてきた玖珂縮みがある。現在は岩国市西商工会玖珂支所がとりまとめ役をしており、20年近く前に再興させようと「玖珂縮みの会」が結成された。その時に縞柄のオリジナルな玖珂縮みがデザインされた。2013年に上記商工会から筆者の研究室に、商品開発の受託研究があったので、商工会のメンバーと研究室スタッフが話し合い、岩国特有の何かを探った。その結果、広島東洋カーブ(以下カーブと記す)の2軍キャンプ

(広島東洋カープ由宇練習場)があることを知らされ、お守りと結びつけて「勝って1軍に昇格する」というストーリーを表現する商品開発を考えた。

その結果、カープのキャラクターである「カープ坊や」の図像を使う許可を得て、お守り、カチューシャ、さらに球場への入場券を入れるチケットホルダーなどのアイテムを開発した。お守りはすでに販売に至っている。

以上のように地域の人々がまちの活性化を目的として、伝統的な織物を再興し、商品開発に活かしていこうという動きを受け止め、それを支援したり、研究室の創作に協力も得てきた。しかしながら、農作業着の商品化となると多くの布地を必要とするため、コスト面で大きな障害となる。それぞれが手染め、手織りという非常に高級な生地素材となっている。そのために、山口県で加工技術が地域資源に認定されているデニムをそれぞれの伝統的な素材と掛け合わせることで、現代的な商品を開発するというコンセプトをもって進んできた。

この考えを推し進めながらも、ここでのテーマである mompekkko レーベルにおいてモンベッコを量産し、実際の農作業に使用できるものを作るためには、機械織で生地から創作する必要があると考えた。そのような時に、日本経済文化学会および日本アートマネジメント学会のそれぞれ九州支部合同学会に参加した。そこで偶然にも久留米大学駄田井正名誉教授に相談する機会を得て、大刀洗町で長年モンベをプロデュースしている合資会社ロォーリングの実藤俊彦代表を紹介された。そして、駄田井教授とともに訪問することになった。

訪問する前は筆者の考えが受け入れられ、オリジナルな生地が織られるか、また10月のファッションショーにモンベッコの製造が間に合うかという心配があった。幸運にも駄田井名誉教授とともに7月末にアトリエ兼店舗を訪問し、そこでかなり好意的な返事を得ることができた。その後、織技術に関する調整や色の問題さらに予算などの詰めを行い、実現にこぎ着けることになった。そして1ヶ月後にオリジナルの布が織り上がった。このスピード感と織物の内容から「奇跡の布」と愛称を付けている。

やまぐち縞の創作に関して、まず縞を世界の縞として位置づけ考えてみた。縞にストーリー性を持たせるためである。日本では大航海時代にアジアから縞柄がもたらされた。名物裂などにその一部が遺されているのでその縞の柄や存在を確認することができる。木綿の事例として江戸時代の元禄期以来、伊勢参りのお土産として松坂木綿が全国に広がった。歌舞伎では今でも「マツザカを着る」というと松坂木綿の縞織を着る

ことを意味しているように、江戸の粋を代表するものであった。

世界に目を向けると18世紀にはトルコなど当方からの流行として縞が流行しており、19世紀にはジャポニズムの影響で縞柄のドレスが流行したことが知られている。一方、モードではなく民族衣装において縞柄が散見されていることは一般的に知られている。

筆者は2000年頃からフィンランドの諸機関とのコラボレーションで研究創作を継続しており、地域の服飾史やデザイン史についても調査してきた。2002年にはヘルシンキ芸術デザイン大学(現アールト大学)大学院芸術デザイン研究科に客員教授として在籍した。その際に、受け入れのピイッパ・ラッパライネン教授に連れられ民俗衣装研究所を訪問し、そこで初めてフィンランドの民俗衣装を再定義した国民服カンサリスプクを知った。

フィンランドのカンサリスプクはウール素材が主で、地域により刺繍のスタイルが異なるとともに、経縞あるいは緯縞の布が使われていることがデザインの特徴である。ここで詳細を述べる余地はないが、フィンランドのソウルブランドとも言えるテキスタイルとファッションのブランドであるマリメッコのファッションアイテムにおけるデザインの主要な柄に縞柄がある。そこで、筆者はその両者の近似的な造形的特徴に興味を抱いて、19世紀以降の民俗衣装を調査した。

ユバスキュラにあるフィンランド工芸博物館での調査や、上記のヘルシンキにある Föreningen Brage での調査、および文献によると地域によって非常に多様な縞柄が発展してきていることが理解できた。そこで、やまぐち縞のデザインについて、山口とフィンランドとの交流をさらに振興させることを目的として、日本の伝統的な着物地用の縞柄、柳井縞および玖珂縮みの縞を参照しながらも、フィンランドの民俗衣装に見られる縞幅のバランスや色調をモンベッコのデザインに取り込むことを決めた。

柳井縞には木綿、フィンランドの縞にはウールが使われていることをすでに述べたが、もちろん同じ縞柄でも印象は異なる。そこで、まずは経縞の柄を一旦、単純なグラフィカルな色合わせとして考えた。多くのフィンランドの縞柄の中から農作業着に合いそうで、またオリジナルができそうなモチーフを参考にして、新しい縞のデザインを考えた。素材開発は筆者の研究室の大学院生である水津初美が参加した。

まずは経糸のデザインから行った。フィンランドのウールの手織りの場合や、手織りで木綿の柳井縞の場

合には、経糸の柄が縞としてかなりはっきりと現れるため、基本は経糸を決めることが最初の重要なデザイン行為なのである。

その後、合資会社ロォーリングの実藤と水津と筆者が協議をした結果、2種類の黒糸（スラブ糸とネップ糸）、紺糸、青糸、そして山口を象徴する夏みかん色を表現するためにからし糸の5種類の緯糸を想定して、製造に入った。結果、1パターンの経糸によるデザイン（70頁上段参照）に対して、5種類の緯糸での織りによって、まったく印象が異なる5種類の布（53頁の写真13 - 16参照）が出来上がった。

結果、緯糸の主張が強く、経糸による縞柄が必ずしも明快には出なかったもので、これは今後の課題となった。いずれにしても、5種類のオリジナルな布ができたことで、まったくオリジナルな2014年モデルのモンペッコとサロペッコを作る準備が整った。

3 モンペッコの服飾デザインとサービスデザイン

筆者は山口県立大学ライフィノベーション研究チームとともに、2013年からサービスデザインに関する研究創作を進めている。サービスデザインはユーザー・センタード・デザイン（User Centered Design）の考え方に立っており、ユーザーの体験価値を創造することが目指されている。ラップランド大学のSINCOおよび本学が構築しているSPSなどを使ったプロトタイピングでは、ユーザーとデザイナーおよびその他のあらゆるステイクホルダー（利害関係者）が同じ地平に立って、必要なサービスやものが創造される。

2013年モデルのモンペッコに関して言うと、衣服としての機能性や美的な側面については情報収集やデザインの最後の場面での試行錯誤を行ったが、農作業着としての機能についての実践的な調査が十分ではなかった。

そこで、2014年モデルを作るに当たり、サービスデザイン研究の初期のファシリテティングとそのシミュレーション実験の学習のために、ライフィノベーションチームの一員である倉田研治講師の研究室とともに筆者の研究室のメンバーが、田植えの場面を想定したロールプレイング（写真1）を実施した。実際の田植えを山口市徳佐における田植えフェスティバルで体験（写真2）し、その時の体験などを情報としながらも、SPSの視聴覚装置による空間でモンペッコのデザインを前提としたロールプレイングを行った。



写真1. 2013年モデルのモンペッコに関する改良に向けたロールプレイング



写真2. 女たちの古民家主催の田植えフェスティバル

ペルソナ（人物像）は以下のようなパターンを設定した（写真3）。「このペルソナは山口で農業高校を卒業し、東京の大学に進学して、そのまま東京でOLをしていたが、仕事を辞め、ちょうど実家に帰ってきて農業を継いでいる26歳の女性である。東京時代の彼氏との遠距離恋愛をしており、絶えず電話でのやりとりが気になっている」。



写真3. ワークショップにおいてペルソナを設定するミーティング風景

ファシリテーターとロールプレイングする役を筆者のゼミの学生が行った。2013年モデルのモンペッコをプレイヤーが着用し、SPSを用いてデザインにおけるいくつかの点について検証した。スクリーンに上記

の各場面を写し、そこで田に向かうドライブの場面(写真4)、田圃で作業をしている途中で電話がかかってくる(写真5)、さらに農作業着のまま仕事の後にコンビニに買い物に行く場面(写真6)などについてロールプレイングを行った。



写真4. 田圃に向かうためのドライブの場面



写真5. 遠距離恋愛をしている恋人から電話がかかってくる場面



写真6. 農作業着のままコンビニエンスストアに買い物に行く場面

そこで、ここではデザインに関するポケットのことに、ロールプレイングでプロトタイピングを行った。特に稲作の場合にはそれほどの用具をポケットに入れることはないが、携帯電話が必需品であり、携帯電話をどのように安全に持参し、同時に作業に邪魔にならないかということが課題であった。ここでの意見収集、農業女子へのアンケート調査、伝統的なモンペ製作の技術さらにデザインサイドの考え方を総合して、2014年モデルのモンペッコのデザインへ

のアプローチを試みた。

SPSを用いる実験については、ラップランド大学芸術デザイン学部のマルヤッタ・ヘイッキラ=ラスタス教授が先行する服飾デザインへのサービスデザインの適用事例を、SPSによるロールプレイングやプロトタイピングの参考にした。ラップランド大学の場合にはデパートのオリジナルブランドの服飾デザインおよび空間デザインについてサービスの観点も加味しながら実践するものであった。筆者のプロジェクトの場合には、自ら制作したプロトタイプを改良してブラッシュアップし、商品化することが目的である。農業女子のアンケートさらに伝統的な久留米絁から新しいモンペを展開している合資会社ロオーリングの實藤俊彦代表との意見交換などを参考に、ポケットのデザインについての結論を見い出した。

筆者は手植えと機械植えの両方を体験した。(写真7)手植えでは足を取られて転び、下半身がすっかり濡れることが想定された。事実、一緒に田植えした1人は下半身がすっかり濡れてしまった(写真8)。



写真7. 田植えで機械植えをしている場面



写真8. 田植えで足下を奪われ田圃に尻餅をついている人がいる場面

このような想定では、2013年モデルのように背面にポケットがあり、そこに携帯電話を入れていること

は危険である。実際には、後のポケットに携帯を入れていてそれを忘れて腰掛けてしまい、携帯電話を壊したという事例もあった。

こうしたことから、ポケットは前にあった方がいいという結論になった。次に、アンケートなどでは前の両側に2つあった方がいいという意見がいくつか寄せられた。特に稲作ではなく、畑仕事の場合にはいろいろな道具をポケットに入れるために需要が大きい。畑作業においても、果樹の場合にはさらに求められるポケットの機能は多様であった。

久留米緋の伝統的なポケットの作りについて調べてみると、伝統的な織をしているメーカーも、新しい企画のモンペを作っているところも、右前1つであった。ローリングの実藤も右前1つが標準だと言っている。そこで少し低めの右前にやや深めのポケットをつけることに決めた。しかし携帯や重要なものが、何かの拍子に外に落ちるかもしれないリスクを考慮して、ポケットの袋の部分に2重にして、その上側にファスナーを付けて重要なものが落ちないように工夫して、オリジナル性をアピールした。2重にしてファスナーを付けると、当然製造コストに反映されるが、この工夫が今回の主要なデザインポイントの1つなので、縫製上のコストアップも甘んじた。



写真9. ポケットの袋部分が二重になっているニューデザイン

次にデザインに注目される点は、裏側の当て布である。2013年モデルの時には付けていない。なぜなら農業者のインタビューで、農作業でそれほど特別な仕草や汚れが想定されなかったことと、農作業後にその服装のままスーパーマーケットに買い物にも行けるデザインを期待する声を重視したからである。

しかし、今年は手植えや手による稲刈りを体験したために、より実感をもってモンペッコに丈夫さを付与するための方法を模索することになった。従来からローリングのモンペには、ヒップと膝の裏側に力

布用の当て布が一般的な使用として取り入れられている。そのために、長方形の布を有効に使うことが求められ、モンペのパターンも直線断ちであり、残った生地を工夫してポケットと当て布に使っている。ここには無駄をなくして布地を有効に使うとする着物の構成に見られるようなサステイナブルな思想が反映されている。

結論として全体のシルエットに関するパターンは2013年モデルに近いものにしたが、股上の削りは直線ではなく、曲線とした。さらに、膝当てと腰当てを縫い付けることになった。サンプルはローリングがMとLを製作し、身近な男女10名程度に試着を願い、結論を出した。

体型によっては、まったくそのモデルのために作ったように感じられるものがあれば、そうでない場合もある。農作業のユニフォームを誰の体にも適応するようなデザインをすることは容易ではない。

ファッションショーでのモデルやショーを行った共催の長門市出身のモデルに、意見を聞いた。今回開発したやまぐち縞 raita 2014の色は青系が1番の気分で、次からし色系である。もっとも小ロットで製造したために、マーケティングに即反映させられるというものではない。しかし、年配の身近な人々の反応も明るい色を求める傾向にあることは事実である。それは年齢を超えて、その傾向にある。

伝統的な柳井縞や久留米緋の柄は比較的地味なものが多く、特に農作業着用という観点からは、汚れ等が目立つので地味な黒か紺のモンペッコが好まれると想定したが、その思いはいい意味で裏切られた。購入した人々はそれほど汚れる農作業着用という感覚よりは、自宅での普段着として着用をしようという考えで購入しているようだ。作務衣の下衣のような感じでモンペッコを着用しようとする声もある。

まさに着用者中心に考えられたものでもあったが、それを商品として幅広く普及させるために、着用者のモンペッコに関するイメージや用途などさらに情報を収集して、広報宣伝や販売のためのマーケティングと合わせて戦略を練ることが課題である。つまり、市販されているモンペは非常に安価であり、モンペッコは比較的高い農作業着となる。それ故に、コストや着装感によっては、デザインは農作業着の延長にあるが、ターゲットは普段着として着用するか、ガーデニングや農業に関心のある人になるかもしれない。

4 「アグリアート・フェスティバル2014 - 大地の心をきく-」の企画と農ガールコレクションについて

今回の企画は、昭恵夫人と主催の一翼を担うことになったジャポニズム振興会副会長の太谷祥子そして筆者が行うことになった。3人で話し合った結果、「アグリアート・フェスティバル2014 - 大地の心をきく-」をタイトルにすることにした。

ショーの詳細は資料としてプログラムを最後に添付するので、ここでは農ガールコレクションに関してのみ述べることにする。

服飾デザインの最終形は、モデルが服を着装して、ある空間でパフォーマンスすることで立ち上げられたムード、あるいはイメージである。それ故に、誰がモデルをするかということがきわめて重要な要素となっている。ファッションコンテストなどにおいては、モデルの表現の善し悪しで勝敗が決まることも多々見られるほど重要である。

今回は、昭恵夫人がプロモデルの藤井リナに声をかけたところ、ボランティアで参加するという意志が示された。次に、原宿の読者モデルでクールジャパンの大使にも選ばれている木村優と世界的に活躍するヴィジュアル系のロックミュージシャン KAMIJO にも昭恵夫人は声をかけた。藤井リナの場合には長年、ファッ

ション雑誌『ViVi』の専属モデルのため、ファッションとして着られる可能性があり、着用のイメージが湧いた。しかし、ピンクなファッションで有名な木村優とロココファッションをステージ衣装に作っている KAMIJO の場合にはどうなるかと心配をした。藤井リナにはサロベッコ、後の2人にはモンベッコを事前に送り、それぞれ自分のイメージでモンベッコをコーディネートしてランウェイを歩いてもらうように依頼した。

当日はプログラムが始まる直前に会場に到着という予定になり、リハーサルもできないためかなり気をもむことになった。結論を言うと、藤井リナは紺系サロベッコを短く切り、ショート丈のサロベッコで長い足と高い靴を履いたスタイル（写真10）で登場した。白いブラウスが短いためウエスト部分が見えているスタイルで、一般の田圃でのユニフォームとしてはかけ離れていたが、農ガールコレクションとしてはこれくらいの奇抜さも必要かと感じさせられた。

木村優は青系のモンベッコの上にピンクのジャケットとウエストにピンクのチュールでチュチュをはいているようなスタイル（写真11）であった。また、KAMIJO はロココスタイルの白のブラウスと黒のベストそして黒系モンベッコに黒のブーツスタイルであった（写真12）。昭恵夫人には芥子色の緯糸のサロ



写真10. 藤井リナによるサロベッコのスタイリングとパフォーマンス



写真11. 木村優によるモンベッコのスタイリングとパフォーマンス



写真12. KAMIJOによるモンベッコのスタイリングとパフォーマンス

ペッコと同じ生地で襟やヨークそして袖口がデザインされたブラウスを合わせたスタイル(写真13)である。



写真13. 安倍昭恵夫人のスタイリング
ヘアメイク：たかこ
サロペッコ
(デザイン：水谷由美子
プロダクト：岡部泰民/匠山泊代表
モデリング：荒木麻耶)

モンペッコに関しては、高校生モデル2名(写真14)、地元の高齢者3名(写真15)、および周南から参加した農業女子の2名が着用した場面(写真16)がある。ここでは、順に田植え、稲刈り、そして畑仕事を想定して、全体の服装のコーディネートを行った。筆者の演出のもと、小物や帽子などのデザインは水津初美が担当した。



写真14. 「田植モンペッコ」モデル：松本健太郎
・中村彩香(柳井商工高等学校生徒)



写真15. 「稲刈りモンペッコ」
モデル：天野登志子・刀祢美千枝・石村康子(長門市)
ブラウス染色：水津初美



写真16. 「畑仕事モンペッコ」モデル：村上順子
・宮川温子(周南の農業女子)

モンペッコ以外の作品としては、2013年モデルの延長として、中濱結香と中村正代が珂縮みとデニムを掛け合わせた作品(写真17、写真18)、荒木麻耶が柳井縞とデニムを掛け合わせた作品(写真19)、そして2014年モデルのために発掘した地域資源を使用した、甲斐少夜子および小田玲子の作品がある。後者の2人の作品については次章で検証する。

2013年に筆者が発表したデザインの「柳井縞×金子みすゞ：ハオリーナ(上衣)とモンペッコ(下衣)」は、白糸の部分だけをマニラ麻の和紙糸で織られた。それを発展させて、すべての糸をマニラ麻の和紙糸で、藍染めもオリジナルで染められた。和紙糸製造と藍染めは備後撚糸株式会社(福山市)、柳井縞は柳井縞の会

の石田忠男会長（柳井市）さらにジャケットとパンツは匠山泊（山口市）の代表岡部泰民が担当した。産学のコラボレーションによる研究創作の成果がこのスーツであり、筆者自らショーのフィナーレで着用した。1枚仕立てのジャケットであるが、しっかりとした張りがありジャケットとしても魅力的な素材である。手織りによる布が、シンプルなジャケットとパンツの存在感を高めている（写真20）。



写真17. 中濱結香作「ワークドレスシャツ」
玖珂縮みシリーズ



写真18. 中村正代作「やまぐちっこ」
玖珂縮み×デニム



写真19. 荒木麻耶作「tsunagu」
柳井縮×デニム



写真20. 水谷由美子デザイン 経緯和紙糸スーツ（中央）
金子みすゞ×柳井縮2014
石田忠男（柳井縮の会会長）柳井縮織り
岡部泰民（匠山泊代表）プロダクト

5 地域の布資源を活かした農ガールファッション (1) 周防大島における祝旗×デニム

筆者は2014年10月に開催した「アグリアート・フェスティバル2014-大地の心をきく-」で、祝旗とデニムを素材に使用した男性用・女性用各2点の農作業着を制作した。食を生み出す行為を纏（まと）って祝う意味を込めた。祝旗のもつ華やかな印象で農ガールコレクションのオープニングを田村洋作曲の祭りの音楽と共に賑わいを演出した。この4点の作品は、サスペンダー付きで裾を絞らず街着仕様である男女1組（写真21）と、鉢巻きに襷掛け風、裾を絞り地下足袋を履いた作業着仕様の男女1組（写真22）をペアで制作し、お田植え神事・収穫祭などの昔からの風習を現代風アレンジできる可能性として、このモンペッ

コ「纏祝(まとほ)ぎ」を提案することを目的としている。ここでは、農業のライフスタイルに明るく厳かなイメージを与えたいという制作者の意図を表現した。1年の仕事初めに正装して豊作を願う意味を込めるなど、祝旗の持つ生地華やかさで日々の農作業への機微を持たせ味わうことも考慮した。金箔が施された祝旗の生地は、華やかさ、優美さを併せ持ち、また手描きの柔らかな描線が農作業着としての地味な印象を払拭した。



写真21. 甲斐少夜子作「纏祝ぎ」
(街着仕様) 祝旗×デニム



写真22. 甲斐少夜子作「纏祝ぎ」
(作業着仕様) 祝旗×デニム

祝旗の素材については、奇遇にも知人の家族が周防

大島町で染工場を営んでおり、生地を譲り受ける事ができた。筆者は染織について学んだ経験があることから、この機に山口県内の染織り産業を調べてみた。三方が海に開かれている山口県は農業の他に漁業も盛んであるが、大漁旗などを製造する染色業者は、数件しかないことが分かった。しかも手染めとはいえ、型染め、シルクスクリーンプリントなどの近代的な技法で製造している所が多かった。従って、手描き・手染めの手法を守り製造しているのは岡本染工場が唯一であることがわかった。その歴史は、昭和7年に始まった。当時は、周防大島内に3件の染工場があり、大漁旗、幟旗などの製造が行われていた。しかし、第二次世界大戦後には2件に減少し、昭和35年頃には、すでに岡本染工場のみとなった。

岡本染工場の染めの特徴は、京友禅の技法を取り入れていることで、柳の炭で大まかな下絵を描き、青花染料^(注7)で細かい線を下書きする。糊には米ぬかともち米粉を混合して練り、蒸した後に塩を加えたものを使用している。もち米粉を加えることで細い線が描ける。これらの材料から至って自然からの恵みを使用していることが伺える。色付け染料としては水溶性のモノゾール染料を使用している。利点としては仕上がりに色移りがないことである。

祝旗の市場は、安価なプリントものが多くを占めており、手染めの旗は少ない。また、組合などの組織がないため市場価格に格差がある。武者幟旗が岡本染工場の主要製品で、祖父母より孫への端午の節句への贈り物とする風習が今でも比較的残っている長野県の業者に卸している。しかしながら、以前よりは伝統的な風習を継承する家庭が減少していることもあり、かつてほど受注数はない。武者幟旗の他には神社の幕や寄進幟なども製造している。現在は岡本勝也の息子である岡本悟が跡を継ぐために修行中である。

また、作品作りのためのフィールドワークとして山口県内で無農薬野菜・有機野菜を育て、自給自足に近い生活を送る3組の農家に、農作業着に求める機能性・ファッション性について聞き込み調査も実施した。そしてポケットの位置や股上のゆとり具合などについて、様々な意見を得た。またウエストにはゴムよりも綿テープ素材が良いという意見もあった。そして、男性用には前立てが必要という声が多かったのでデザインに取り入れた。また、2014年9月に安倍昭恵内閣総理大臣安倍晋三夫人と共に長門市油谷の棚田で稲刈りを行った際、参加者に祝旗を使ったモンペッコの試着を依頼した。そこで好評を得たのでシリーズ化して、

農ガールコレクションへと発展させた。

通常であれば着古したものを農作業着に使用することが多く、フィールドワークで調査協力した農家も実際、汚れたり破れたりしてもよい服を農作業用に使用していた。しかしながら、医食同源と言われるように、人間の身体は食べたもので出来上がる。その食べ物を生み出す行為である農作業だということを認識するために、視覚的にその行為を敬い、自然への感謝を纏うことを表現したいと考えた。

今回岡本染工場との縁により祝旗の生地を使用することになったが、日本の伝統産業の実情を知るきっかけとなり、市場に出すことなく処分される生地があることや伝承することの大切さを痛感した。と同時に筆者は生地に別の命を吹き込むことができたことに喜びを感じた。これが岡本染工場の新たな商品開発を考えるきっかけとなることを期待する。

また、古くは天災からの無事を祈り、地域の中で人々の結束を固め、豊作を願う行事などが、時節毎に行われていたが、昨今ではそのような行事が蔑ろにされている傾向にある。だが、若い人への農業の関心が高まり、農業従事者が増え、楽しい祭事が催されるような風土が形成されつつあるケースも散見できる。地域の繋がりが深まるような服飾面からのアプローチの可能性を今回の作品に感じてもらえたら幸いである。現代のライフスタイルでは、安易に食物が手に入り、作り手の顔も見えず、どのように野菜が生育するのかを知らない子供が多くいる。次世代の子供達が食べる事への関心や農作業への意欲を掻き立てられるようなファッション性のある農作業着をさらに研究・発信していきたい。

(文責：甲斐少夜子)

(2) 三世代 NORA スタイル

(家庭に眠っている古布×柳井縞×アロハ生地)

筆者は農ガールコレクションにおいて、「三世代 NORA スタイル」というテーマで、三世代家族を想定した農作業着を発表した(写真23)。

制作するに当たりまず考えたのは、どんな人のための農作業着を作るかということであった。その時ヒントになったのは、阿東の果樹園のファミリー経営農家である。筆者は農業振興のためには、農業以外の人、若い人そして女性を引き入れるだけではなく、家族の結束力で経営を永続的に受け継いでいくことが大切であると考えた。そこで、祖母(50代)と母(30代)と孫(10代)の農業ファミリーというコンセプトを想定するに至った。



写真23. 小田玲子「3世代NORAスタイル」古着×柳井縞

筆者は長年、服のリメイクに取り組んできたので、作品制作にあたっては地域に伝わる布や古布を使って作ろうと考えた。昨年実家で整理を手伝った際に、古い絵餅の布(写真23左パンツの素材)を発見し実母から提供を受けた。両親はこの布のことは全く知らないと話したことから、実父の代よりも前のものだと思う。実母は元は布団だったのではないかと推察した。

この布は地域資源とは言えないが、昔のものの良さを再認識することや、リユース、リメイクなどの資源を循環させる姿勢は現代社会において大切なことであるため、この布を使うことにした。筆者はこの大胆な文様にモダンな印象を感じたために、祖母モデルのパンツに仕立てることにした。テーバードパンツと呼ばれるタイプで、裾にいくほど細くなるシルエットになっている。これは58歳の祖母モデルが着用した。モダンな柄行とシルエットが好評で、譲ってほしいという人もいた。布が柔らかくて着心地がよかったとのことだった。

またコレクションの準備が始まった頃、大学関係者から4枚の着物の提供を受けた。着物の持ち主は提供者の祖母で、呉服店を経営していた。着物への愛着から大事に保管していたが、着る機会がないということで寄付を思い立った。

昔は、木綿の着物については着古した後は布団に仕立て、次はおむつそして最後に雑巾として使うというように、徹底的に使いきる文化が根付いていた。しかし最近、最後まで無駄なく使うというサステナブルな習慣は廃れつつある。このような現状において、

大切にされていた着物を使って作品を作ることは意義のあることなので、改めてその布を大切に使うことにした。

あられ模様の緋はかすれた感じが柔らかい印象なので、34歳の母モデル（写真23右）のサルエルパンツに仕立てた。このパンツの特徴は、股上が深いことである。身長約170センチの女性2人が試着した。座った時の腰回りの締め付け感がなくていいという2人の感想だった。この布は、携帯電話や財布などを入れるポシェットの一部にも使用した。

初期のモンベッコには世界の生地を使って作られたバージョンがある。その中のひとつがハワイの生地で、周防大島町で調達されたものだ。この布で長方形の布を合わせただけのシンプルなデザインのベストを作った。

母モデルはショー会場がある長門市の地元の人に頼んだので、試着はモデルと同じサイズの人を探した。家庭菜園で野菜や花作りをする人だったので、野良着に関する意見を聞きフィッティングした。農作業をするとき、上着が上に引っ張られて背中が見えてしまうので、後身頃は前身頃より長くする工夫をした。これは結果的にデザインによる改良がされているという評価につながった。

提供を受けた着物の中に、縞が太く遠くから見ても見栄えのする綿入れがあった。ほどいて綿を丁寧に取り除いて洗い、子供用モデル（10代）（写真23中央）のパンツを作ることにした。若い女性の間でショート丈のパンツが流行っているが、裾を絞ったデザインのカボチャパンツも人気がある。これは小学生の女兒にも気に入られると確信し、試作した。

モデルは小学3年で10歳の女兒であったが、このパンツが大変気に入って、本番当日は裾をもう一折してさらに短く穿くというアレンジを自ら加えていた。

また、子供モデルのトップスの袖と祖母モデルの被り物と母モデルのポシェットの一部分には、地域資源である柳井縞を使用した。古い伝統が現代に息づいているという点に注目して起用することにした。

コレクションが終わってから、3世代作品に出演した58歳と34歳のモデルに感想や意見を聞いた。

地元の反響は思った以上にあり、地元のニュース番組や広報でも大きく取り上げられた。コレクションにはたくさんのグループが出演したが、ニュースも広報も3世代の写真がトップ扱いだった。地元のモデルによると3世代というコンセプトが良かったのではないかという意見だった。

地域において子供はまさに宝である。筆者はこのイベントの視察を兼ねて油谷に稲刈りに行ったが、廃園となった幼稚園でお世話になった。少子高齢化の行きつくところを目の当たりにし、地域にとっていかに子供が大切か考えさせられた。そういう意味でも3世代というコンセプトにしたことで地元の住民の関心と呼ぶという効果があった。同じ素材で少しずつ変化をつけたユニフォームと捉えてもよい。

現地モデルは本番の日に初めて服を着ることになっていたため、事前にデザイン画を送ってイメージをつかみやすいよう工夫をした。3人とも「デザイン画を見てテンションが上がり、着ることが待ち遠しかった」とコメントした。コンセプトやイメージを正しく伝えるためには、デザイン画を正しく且つ魅力的に描く必要があると感じた。

さらに「野良着としてはもったいないくらいおしゃれなので、畑からスーパーへ買い物に行けそうな感じ。泥つきの靴を脱いで、ブーツに履き替えて上着か何かひとつ付け加えれば、ちょっとした外出はできそうだ」というコメントもあった。

農ガールコレクションを終えて気付いたことは、コミュニケーションの大切さである。モデルとは当日まで会えないこともあり、頻りに連絡を取り合った。着る人と作る人がお互いに寄り添いながら意見を出し合って作品を作ることの大切さを感じた。今回はSPSを使ったデザインのアプローチをしていないが、今後はサービスデザインの応用により、次回コレクションに取り組んでいきたい。（文責：小田玲子）

まとめ

以上に述べたように、mompekkko レーベルを作り、長門市の共催の元、ラポールゆやでコレクションを発表した。著名なモデルやミュージシャンとともに昭恵夫人もモデルとして参加した。左記の著名人たちの他に、京都に本拠地を置くジャポニズム振興会が主催者の一翼を担ったことから、観客が全国から集まり、長門市は非常に賑わったはずである。

タレントのファンも含め、地域内外の人々が客席において交流できたことも地域の活性化に役立った。

ショーと同時に玄関前広場では農業女子とのコラボレーションによって、ダイハツ株式会社が開発した8色の軽トラックが展示された。また、ロビーでは長門市の自然栽培米や柳井縞、玖珂縮み、さらに山口県立柳井商工高等学校による工業系生徒が作った織り機と、商業系生徒が織った柳井縞のデモンストレーションなどが

あった。

また、ショーの終了後にモンペッコを販売し、当日持参した約20着がその場で完売した。地元の女性たちに気に入られ、長門発のモンペッコとなった。

ファッションショーの波及効果として、10月31日の日経新聞夕刊1面にファッションショーの記事(写真24)が掲載された。小さな街でのファッションショーであったが、社会的な広がりとしては意義があった。



女子大生らがデザインした農作業着を披露 (山口県長門市)

変わる
農

おしゃやかな作業着で農業を盛り上げよう。棚田で有名な山口県長門市で12日、ファッションショー「農ガールコレクション」が開かれた。人気モデルや地元民ら約30人がデザインと機能性を兼ねた服装で登場。壇上でポーズを決めると拍手や歓声がわき起こった。山口県立大企画デザイン研究室などが主催し、今年で2回目。学生らと企画した安倍昭恵首相夫人も参加した。

次代は農ガール

した。服を制作した中浜結香さん(21)は「これをきっかけに若い世代が農業に関心を持ってくれたら」と期待する。行政も動き出した。農林水産省は女性の就業を増やすため、企業と組んでプロジェクトを進行中だ。コージェット、井関農機、三越伊勢丹ホールディングスが女性の視点を生かした新商品やサービスを開発している。タイハツ工業は9月、ピンクやオレンジ色など鮮やかな車体の軽トラックを売り出した。新たな担い手として「農業女子」にスポットライトが当たっている。(写真・文 小倉裕美)

写真24. 日経新聞夕刊全国紙1面掲載記事 2014年10月31日「変わる農3 次代は農ガール」

また、農林水産省の誘いで新宿伊勢丹×農林水産省農業女子プロジェクトの「イセタン「スタイリングマルシェ」」で作品を発表する機会を得た。ここに全国の魅力的な農業女子のショップも出展されていて、交流ができたことで農業女子の気概を感じることができた。彼女たちはメディアにも注目されている人たちが、そのような時に、着る服がないという言葉があり、1人はその場で持ち合わせていたモンペッコを購入し、今後「取材の時に着たい」とコメントした。

3名の農業女子がモンペッコを舞台上で着て、その感

想を言う場面(写真25)があったのだが、サイズ感、着心地、趣味的な要素も気に入られたので、研究室のメンバーは非常にやりがいを感じて舞台を後にした。



写真25. 新宿伊勢丹×農林水産省農業女子プロジェクトの「イセタン「スタイリングマルシェ」」でモンペッコとサロペッコの発表

さらに、広島県農林水産局農業技術課技術振興グループから「農業高校・農業技術大学校合同フォーラム2014」への参加要請があり、モンペッコだけが広島で発表される(写真26)という機会もあった。

作業服ファッションショー

カラフルで、かわいらしいデザイン、農作業服を紹介したファッションショー

機能性にかわいさ重視

会場では、作業服のファッションショーもあった。モンペッコをモチーフにした山口県立大(山口市)が開発したモンペッコ、アウトドア用品店などのファッション性も重視したウェアが披露された。モデルを務めた油木(広島県神石高原町)の2年細川葵さん(17)は「かわいくて、気分良く作業できそう」と声を弾ませた。オレンジやカーキなど8色がそろった軽トラックや、高級外車を手掛ける工業デザイナーによるトラクターの展示もあり、生徒たちは次世代の農業に夢を膨らませていた。

写真26. 中国新聞掲載記事 2015年2月1日「作業服ファッションショー」

以上のように農業女子のネットワークによって、モンペッコは全国に情報発信されている状況である。今回は小ロットでの製造であるが、少しずつ消費者の方に購入されており、顔がわかるような売り買いがあって、反応も見られるのでちょうどよい規模で進んでいる。

2014年モデルは、2013年モデルから展開させて、

新しい生地 of 製造にこぎ着けたことで、一定の量産化が実現したことが大きな成果である。さらに研究室スタッフが実際に田植えや稲刈りなどにモンベッコを穿いて参加することで、デザインに関してより自信をもってコンセプトを出せたことは意義があった。

さらに、新しいデザイン手法であるサービスデザインの道具 - SPS を使った視聴覚空間でロールプレイングすることで、あらゆるステイクホルダーが同じ地平で語り合え、自由にアイデアを出せることは意義があると確認できた。

今後もサービスデザインの手法を用いて、稲作のみならず、果樹や野菜などの仕事別に求められる機能や環境、さらにそこから新しいデザインの対象などが発見されることで、農業の活性化とともに、それに関連する産業などの活性化に繋がればよいのではないかと期待をしている。

戦後のある時まではモンベが農作業の定番であった。会津若松ではかつて4つの地域で農作業着であるモンベが地域のコミュニティで制服化されていて、同じ縞の柄のモンベを着用していた、と会津若松でのフィールドリサーチで聞いた。地域を識別するユニフォームでもある。この点を参考にすると、地域固有の縞柄を織り、地域コミュニティのコミュニケーションの道具になったらいいのではないかと考えている。祭りの時、共同で農作業を行う時、家族で世代を超えて作業をする時など、服飾文化を通じて、新たに農業における文化を発信していけることが本研究の創作コンセプトの根幹をなしている。

稲作は日本の古代以来の伝統文化でもあり、信仰の背景もある。農業が単に産業であるという視点から、日本人の精神文化との結びつきも振り返ろうとしたのが、今回のテーマ「大地の心をきく」であった。職業によって大切にしている世界観があるので、どの職業でも同じ作業着を着るのではなく、機能性も合わせて精神文化を託す意味でもモンベッコが新しい農作業着として取り入れられることを期待している。

現代の若者はジーンズやサロペット、ツナギやカーゴパンツなどを着用しており、真夏の暑い日の蒸暑さを回避するような機能的な作業着を着ていないことが多い。そのためにも従来のもんべを改良した着ごちのよい農作業着の開発は必要である。

最近の現象として、都会の若者が地方に行き、農業の法人化を作る動きも出て来ている。農業への意識を着るもの、つまりライフスタイルによって他者に伝えることも大切である。今後も日本の農業の活性化に向

けて、精神性と機能性の両面からモンベッコのデザインと普及の活動を継続して行きたいと考える。

謝辞

農ガールコレクションは制作スタッフ自身の農業体験および農林水産省農業女子プロジェクトの皆様の協力の下でデザイン開発されました。これらの指導やモンベッコの共同開発他をして頂いた安倍昭恵内閣総理大臣安倍晋三夫人に心から感謝申し上げます。その他、ショーの共同主催のジャポニスム振興会、モンベッコ・レーベルを立ち上げ企画から販売までを協力した有限会社ナルナセバ、モンベッコ製造に尽力した合資会社ロォーリングおよび匠山泊、サービスデザインの場所を提供した山口ケーブルビジョン株式会社、その他ご指導、ご協力を頂いたすべての皆様がこの場をお借りして深くお礼申し上げます。

注

- 1 水谷由美子・安倍昭恵・武永佳奈・水津初美共著「モンベとサルッパカマをリデザインした農作業着の服飾デザイン『農業スタイルコレクション 2013 in 長門油谷 with 会津若松』を事例として」『山口県立大学学術情報』7号 山口県立大学、2014年、27 - 49頁。
- 2 「農業女子プロジェクト」は、女性農業者が日々の生活や仕事、自然との関わりの中で培った知恵を様々な企業のシーズと結びつけ新たな商品やサービス情報を社会に広く発信し、農業で活躍する女性の姿を多くの皆さまに知っていただくための取り組みです。
農業女子プロジェクトについて「農林水産省」2014年12月14日取得。
<http://www.maff.go.jp/j/keiei/nougyoujoshi/>
- 3 SINCO-LAB, SINCO, <<http://sinco.fi/sinco-lab/>> accessed 2014 DEC 1
- 4 2013年の研究成果は、以下に収録されている。山口県立大学ライフイノベーション研究チーム編『SPS サービスデザインで生活が変わる 社会が変わる - ライフイノベーションの視点から -』東洋図書出版、2013年。
- 5 山口県立大学ライフイノベーション研究チームメンバー、チーフ：水谷由美子、研究スタッフ：中村仁志（看護栄養学部長・教授）、松尾量子（国際文化学部教授）、倉田研治（国際文化学部講師）、山崎あかね（看護栄養学部講師）、長谷川真司（社会福祉学部講師）、太田智子（看護栄養学部講師、2014年度から参加）は2013年度に結成された。
- 6 山口県立大学企画デザイン研究室国際共同研究に参加している学部生：中濱結香・中村正代・斉藤輝（4年）、荒木

麻耶（3年）

- 7 「青花は露草の花汁を和紙に充分浸ませて乾燥させたものです。水に漬けると美しい青色の液がでます。」 切畑健『伝統工芸染織篇 6 友禪』衣生活研究会、1974年、20頁。

参考資料1

モンペッコに関する農業女子のモニターへのアンケート結果

アンケート集計：中濱結香

●モンペッコの機能について率直なご意見を聞かせてください

- ・涼しい、軽い。はいているのを忘れそう。ゆったりしていて楽。長靴もはきやすい。
- ・涼しい、ゆったりとしていて動きやすい。
- ・トイレに行くとき脱ぎ着が楽。
- ・動きやすくてとてもよかった。秋口は今回のような生地でもよいが、夏などはもう少し薄手でもよい。
- ・ゆったりしていて動きやすく涼しい。コットン？なので汚れやすい。
- ・着ていて疲れず、動きやすい。軽くて楽。
- ・生地がしっかりしているのに涼しい。着用して作業はしていませんが、汗をかいてもべたべたしないのではという印象でした。
- ・普段はいているものはどうしても屈むとき、腰がでてしまいます。モンペッコは腰が出ず、ゆったりとしていてとても動きやすかった。
- ・さらさらした肌触りがとてもよかった。
- ・サイズが少し小さかったので着用していない。
- ・動きやすい。
- ・ゆったりしているので動きやすく脱ぎ着しやすいのでよい。
- ・生地がうすすぎて作業していると破けそうで心配。涼しそうではある。汚れるのでどうなのか？
- ・ゆるっとしたデザインなので、立ったり座ったりの作業がしやすい。
- ・普段Lサイズなのですが、お借りしたのがMサイズでちょっとびちびち（笑）でもゆったりめにつくってあるから破らずに過ごせた。ふともも、おしりが大きいのでLサイズが欲しい。屈みやすくなる。

●ポケットの位置と数についてご意見を聞かせて下さい。

- ・サイドポケットが2つ、後ろに1つ。ファスナーなしのがあるといい。後ろだと使いづらい。
- ・前左右に1つずつ、横に1つずつ（カーゴパンツみたいに）。後ろは見えづらいので出し入れしづらい。ファスナーが引っかかってしまった。
- ・後ろに深いポケットが2つあるといい。前はものを入れるとしゃがみにくい。

- ・カーゴパンツのように横にあっても（太ももあたり）良いのかと思った。
- ・右後ろに一つ欲しい（手袋をすぐに入れる）。ファスナーをつけるなら両サイドにあってもいいかも
- ・前左右どちらかについていると助かる。
- ・前左右どちらにも欲しい。チャックなしがいい。
- ・前右に大きめ1つついていて、ペンとかメモ帳をいれると取り出しやすく便利。
- ・できれば2つ欲しい。
- ・両サイド各2つ。
- ・前の左右（スマホ、ペンなど入れる。後ろだと屈んだときつぶしてしまう。）
- ・右側のうしろポケットが1つ欲しい。チャックはなしで、そのまますぐいれたい。
- ・後ろ右→携帯電話を入れる。
- ・現在の後ろ左で十分。
- ・側面で少し下めの位置がよい気がする。携帯やスマホを主に入れることが多いので後ろだと画面が割れそう。前だと屈みづらいので。

●ポケットに求める機能は何でしょうか？

- ・ケータイ、手袋、ハサミなどを作業中にさっと取り出すのにうしろだと使いづらい。ファスナーは開けにくい。
- ・ものが出し入れしやすい、ものが落ちにくい。
- ・ハサミとスマホを入れたい。
- ・作業中ポケットには携帯を入れる。後ろだと座るときに少し邪魔になる。横の位置でなおかつ土が入らないようチャックは必ず欲しい。
- ・形態やグローブを入れるためには必要、ファスナーがいるのは両サイドで、後ろはいらぬ。すぐかがんでしまいまらづらぬ。両サイドのポケットには土などが入ってくるのでファスナーが欲しい。
- ・携帯や鍵など、常につけていたいのと、後ろのポケットだと落ちたり、屈んだときに邪魔。
- ・農作業中も電話や写真を撮るため、いつもスマホを前ポケットにいれておきたい。あとねじなど細かいものもとりあえずポケットに入れたい。チャックなしがいい。
- ・チャック付きでペンが落ちないといい。
- ・ハンカチ、携帯を入れたい。
- ・携帯などがあるのでカーゴパンツのように両サイドにあると座った時邪魔にならない。
- ・女性サイズでも中に入れたときものが落ちてこない作業着が欲しい。今使用しているものは屈んだとき

- など、中のものが落ちてしまう。
- ・手袋や機械のカギを入れるので深い方がいい。
- ・ハサミを入れたいので生地が薄いと破ける。せめてポケットだけでも補強してほしい。
- ・チャック付きでありがたい。
- ・車のカギ、携帯、スマホぐらいが主に入るもの。作業時にポケットの中身が出てこなくて取り出しやすい。屈んだときに中身がじゃまにならないなど。

●モンペッコのデザインについてご意見をお聞かせ下さい。

- ・そのままお店にも行けそうなデザインでとてもかわかった。(迷彩柄)
- ・布地が個性的な柄で良い。いろんな柄、色があると選ぶ楽しみがある。女性スタッフにも「エスニックな感じが素敵と言われた。(ガーナ・ブルー)
- ・子供におばあちゃんみたいと言われた。(ハワイ・白×黒)
- ・すごく気に入った。今すぐにでも欲しいと強く思った。職場の方にも可愛いと言っていた。(マリメッコピンク)。
- ・布地がかわいいので「私も欲しい！！」と言われた(マリメッコブルー)。
- ・農家らしく、柄がかわいい(ハワイ 白×ネイビー)。
- ・布地がかわいい、柄もすごくきれい。男性用を要望する声も(会津ミックス)。
- ・布地がかわいい。こんなモンペッコをきて作業したい。(ガーナ黄色)。
- ・少し柄がきつい。もう少しシンプルがいい。(フランスピンク)。
- ・無回答(会津濃ピンク)。
- ・かわいい。意外と何でもに合いそう！(マリメッコカーキ)。
- ・布地がとてもシックでかわいい(フランスパープル)。
- ・可愛くない。布地もおばさん臭い。ゆったりしすぎて機械を使用する際引っかけりそうで危険な感じがした。(フランスカーキ)。
- ・足が太くても楽々はけて動きやすい。
- ・意外にスリムだった。布の肌触り(着心地)がよかった。

●普段の農作業着はどのような点を考えて購入していますか。

- ・夏は涼しい、冬は暖かく、とにかく動きやすいこと。
- ・じゃぶじゃぶ洗える、日焼けしにくい、乾きやすい、

- 動きやすい、虫が入りにくい、乾きやすい。
- ・つなぎまたはユニクロのレギパン、生地の厚さ。
- ・動きやすさ、洗濯のしやすさ、価格も気になる。可愛さもとっても重視している。
- ・汚れてもすぐに洗える（ヤッケなど）。あまり高くないもの（安すぎてもだめ）。
- ・機能性、通気性を主に考える。
- ・土がついてもあまり気にならない色、ある程度立ち屈みが楽でおばさんぽくないデザインのもの。
- ・動きやすさ、デザイン。
- ・スタイル、はき心地。
- ・布地がしっかりしている、ポケットの位置など。
- ・自分に合うサイズがあまりないため(女性ものを売っているところ) 合うものを探すのが大変。動きやすさが一番大事。男性ものは小さくてもベルトをしてもずり落ちる。
- ・伸び縮みしやすい、動きやすい、生地がよい。
- ・安全性、作業性。夏場は速乾性、UVカット機能。冬場は保温性。
- ・見た目かっこいいか、かわいいか。動きやすさ（サイズやストレッチが効いているかなど）。
- ・泥汚れ、油汚れがついて取れなくなってもおかしくないものを着ていて（古着、作業着など）、ズボンには刺し子で穴をふさいでなくこともある。

●その他農作業着などで困っていることや希望などがあればお書き下さい。

- ・パイプにひっかけて破れることがあるので、丈夫で機能的なのが1番求められる。
- ・冬場とても冷えるので暖かくて動きやすい冬用作業着(上下)が欲しい。また薄手で温かく滑り止めのついた手袋。
- ・股下にまちのあるモンペが動きやすくて好き。
- ・もっともっとかわいい農作業が、手軽に手に入ると嬉しい。北海道なので、つなぎよりもやはり「ヤッケ」素材のものがいろいろなデザインであるといいのになと思う。
- ・なかなか色がなくありきたりなくみあわせになってしまう。いいなーと思うと高い。機能性を考えるとアウトドアブランドが一番いいが、高いので、安いものを買うと結局すぐ破れてしまう。ヤッケ素材が一番欲しい。
- ・破れにくいもの、汚れにくいもの探している。
- ・しゃがむとパンツが見えてしまうので腰からエプロン(前掛け)をしているのでまた上の深いズボンが

- 欲しい。
- ・サイズが大きいのが多く、自分にぴったりで動きやすい服がなかなかなくて困っている。ぜひモンペッコを販売してください。
- ・自分でつくってみたい
- ・汗がたくさん出る時期なので、タオルなど首にまいているがすぐに落ちてしまったり使い勝手がよくない。タオルをまとめるおちないものが欲しい。
- ・サロペット(つなぎ)タイプで胸ポケット付きがあったらいいなあ。モンペッコの形はすごく気に入ったので、普段着にでもできそうなカモフラ柄とかからのバリエーションがあれば欲しい。
- ・季節の変わり目の時の着方、特に3月頃はハウスで作業をしているとだんだん熱くなる。朝は寒いので、温かい下着を着たいというジレンマ。

写真撮影場所&撮影者リスト

- 山口ケーブルビジョン株式会社(撮影者:倉田研治研究室) 1,3,4,5,6
- 山口市徳佐の田圃(撮影者:斎藤輝) 2,7,8
- ラポールゆや(撮影者:OOMO Photograph.) 9(拡大),10,11,13,14,15,16,17,18,19,20,21,22,23
- ラポールゆや(撮影者:KAMIJO 所属事務所) 12
- 伊勢丹新宿店(撮影者:谷査恵子) 25

添付資料 アグリアート・フェスティバル2014「大地の心をきく」プログラム



アグリアート・フェスティバル2014 大地の心をきく

トーク × コンサート × 農ガールコレクション

安倍 昭恵
大谷 暢順

レチスマック

山口県立大学 企画デザイン研究室
特別ゲストモデル 藤井 リナ 木村 優 KAMIJO

2014年 10月12日(日)

14:30 開場
15:00 開演

ラポールゆや
山口県長門市油谷新別名833

【企画】安倍 昭恵×大谷 祥子×水谷 由美子

【運営】アグリアート・フェスティバル実行委員会
山口県立大学企画デザイン研究室

【主催】アグリアート・フェスティバル実行委員会
ジャポニズム振興会 <http://japonisme.or.jp>

【共催】長門市

【協賛】山口ダイハツ販売株式会社



ごあいさつ

名誉理事長 安倍 昭恵 [内閣総理大臣 安倍晋三夫人]



いま、農業をしたいという若者が増えていますが、この動きを応援したいと思います。もし、さらさらした若い女性がかわいい農作業着を着て田畑で働いていたら、農業のイメージが向上し、農業本来の楽しさややりがいを見いだす若者もさらに増えるのではないのでしょうか。こうした思いで、昨年、山口県立大学の学生たちとの共同研究として、この油谷町で農業スタイルコレクションを開催しました。

今年は、ジャポニスム振興会のご支援を得て、この取組みを更に発展させ、豪華なスペシャルゲストもお呼びして、「アグリアート・フェスティバル2014」を開催します。この催しを通じ、より多くの皆さまに、農業の素晴らしさを感じて頂けたらと願っています。

江里 健輔 [公立大学法人 山口県立大学 理事長]



悠長な空気が漂う長門の誇る「油谷棚田」。農業文化を脈々と継承してきた「棚田」に思いを馳せながら、トーク×コンサート×農ガールコレクションが昨年に引き続き、ラポールゆやで開催する日を迎えました。安倍昭恵内閣総理大臣夫人と水谷由美子山口県立大学国際文化学部長との共同研究である農ガールコレクション、大谷暢順氏を交えたトークショーなどを中心に、多彩且つ魅力的なプログラムが組み込まれています。

若者が都市へ都市へと流れ、日本各地の中山間地域の過疎化は目を覆うばかりです。本年のフェスティバルが「棚田」の活性化に繋がり、若者が末代まで受け継ぐマインドが醸成されることを期待しています。

どうかゆっくりとお楽しみ下さいませ。

大谷 暢順 [ジャポニスム振興会 会長 本願寺法主]



ジャポニスム振興会では、日本の心と文化を伝える事業を全国で展開しております。山口での活動は、日本の要である農業を推進・応援する事で、日本の国力を高めるものと確信しております。次世代を担う者たちが、田植え、稲刈りに参加し土に触れる事は、自然に抱かれ生きていくと実感できる最良の機会です。

本願寺開立(かいりゅう)の祖蓮如上人は、この世の救いは藁を、来世の救いは稲を手に入れるようなものと仰られました。これは信心が備われば、今を生きる力と希望を手に入れる事を指しています。自然に左右される農業だからこそ、人間中心ではなく神佛に帰依する精神が育成されるのではないのでしょうか。田植え歌、収穫祭りと古から伝わる喜びと感動を、本日皆さんと共有できることを楽しみにしております。

大谷 祥子 [ジャポニスム振興会 副会長 箏曲家]



アグリアートフェスティバルに企画から参加できたことを心から喜んでおります。共通の知人のご紹介で水谷由美子氏と出会い、この活動を知る事となりました。初めての田植え、稲刈り体験は、農業が生きることに直結しているという事を教えてくれました。

さて、私は普段、佛教文化の継承を目的に、箏曲を中心とした音楽活動をしております。今回は長門出身の詩人金子みすゞさんの歌詞に曲を付けさせていただきました。作曲は得意ではないのですが、今回は不思議なことにすらすらと旋律が湧き上がってきました。レチスマックの音楽と共に、初演をお聞きいただけることに感謝いたします。レチスマックは10年前に静岡で結成したネオクラシックユニットです。今回は世界でも希少なサヌカイトの音色をお聞きいただけます。1300万年前の悠久の流れを経て響く石の音をお楽しみください。

本日は、農業と長門市の未来への希望の一日となるように、皆様と盛り上がりたと思います！山口県立大学、長門市をはじめ、実行委員、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

大西 倉雄 [山口県長門市長]



このたび「アグリアート・フェスティバル2014」が安倍昭恵内閣総理大臣夫人をはじめ、多くの方々のご尽力により、ここ長門市油谷で盛大に開催されますことを、地元市長として心からお慶び申し上げます。

現在、日本の農業を取り巻く環境は極めて厳しく、とりわけ担い手不足は喫緊の課題であります。今回のような取り組みにより、若い世代の方々に農業へ興味の日を向けていただくと同時に、本市の進める農業・肥料・除草剤を一切使用せず、環境にも、食べる人にもやさしい自然栽培米などの新たな試みをうまく化学反応させていくことが、農業の次の扉を開いていくものと、期待しているところであります。

本フェスティバルのご成功と、本日お集まりの皆様方のご健勝、ご多幸を祈念申し上げ、お祝いのごこととします。

実行委員長 水谷 由美子 [山口県立大学国際文化学部長 教授]



実りの秋です。全国の田園では黄金色に光る稲穂が日本の大地を美しく彩っています。タイトル「大地の心をさく」は古来から継承して来た稲作文化に改めて注目しようとするものです。2回目となる今年は安倍昭恵内閣総理大臣安倍晋三夫人およびジャポニスム振興会の皆様と田植えや稲刈りを体験しました。

今年は自らの農業体験に加え農林水産省の農業女子プロジェクトに参加されている方々の意見をモニタリングして、農ガールコレクションを産学公官の協働で開発しました。かつての日本の農作業着の代表であるもんべには縞織物が全国各地で使われていました。山口県では柳井縞と新たに縞織で織られた玖珂縮みの伝統織物があります。今年はこれらの手織りの伝統文化や技術を参考に「やまぐち縞raita2014」を久留米縞の機械織技術とのコラボレーションで開発し、2014年版のレーベル「mompecko」コレクションとしてモンペッコとサロベッコを発表します。

本公演実施に関してご支援とご協力を頂きました長門市をはじめ関係者の皆様にこの場をお借りして心からお礼申し上げます。

PROGRAM

■プロローグ

■PART I トークショー

安倍 昭恵 × 大谷 暢順
モデレータ 水谷 由美子

■PART II コンサート

レチスマック 大谷 祥子(箏) 佐藤 まどか(バイオリン)
小松 玲子(サヌカイト・パーカッション) 安田 正昭(ピアノ)

演目 1 to the heaven 天空の彼方へ
2 white garden 春の花園
3 love letter
4 金子みすゞへのオマージュ
5 venus

■PART III 農ガールコレクション

1. 地域資源を活かした農ガールコレクション

- 「纏祝ぎ」祝旗×デニム 制作:甲斐 少夜子(山口県立大学大学院 国際文化学研究所1年)
モデル:大谷 沙織 立松 恵里奈 Jorge Galue Petter Olsson
- 「tsunagu」柳井縞×デニム 制作:荒木 麻耶(山口県立大学国際文化学部 文化創造学科3年)
モデル:荒木 結真 小山 由紀穂
- 「3世代NORAスタイル」古着×柳井縞 制作:小田 玲子(山口県立大学大学院 国際文化学研究所1年)
モデル:三好 克江 松下 聡子 松下 未来
- 「新生柳井縞モンペッコ」高校生によるオリジナル織物 制作:山口県立柳井商工高等学校 指導代表 小川 敦
モデル:清水 真緒 善村 茉由
- 「やまぐちっこ」玖珂縮み×デニム 制作:中村 正代(山口県立大学国際文化学部 文化創造学科4年)
モデル:齋木 奈央 古川 絵里
- 「ワークドレスシャツ」玖珂縮みシリーズ 制作:中濱 結香(山口県立大学国際文化学部 文化創造学科4年)
モデル:坂 麻子 佐田 香織

2. レーベル「mompekkko」コレクション モンペッコ&サロペッコ with 安倍 昭恵

- 田植えモンペッコ モデル:松本 健太郎 中村 彩香
- 稲刈りモンペッコ モデル:天野 登志子 刀裨 美千枝 石村 康子
- 畑仕事モンペッコ モデル:村上 順子 宮川 温子
- 農ガール・農ボーイのためのアレンジメント
・モンペッコアレンジメント モデル:木村 優 KAMIJO
・サロペッコアレンジメント モデル:大谷 沙織 藤井 リナ 安倍 昭恵

テキスタイル「やまぐち縞raita2014」企画&服飾デザイン:水谷 由美子
テキスタイルデザイン&コーディネート:水津 初美(山口県立大学大学院 国際文化学研究所2年)
テキスタイル&モンペッコ/企画&プロダクト:眞藤 俊彦(合資会社ロオーリング) モンペッコ/モデリング:中濱 結香
サロペッコ/企画&プロダクト:岡部 泰民(匠山泊) サロペッコ/モデリング:荒木 麻耶
帽子制作:水津 初美×桑田 智之(有限会社桑田製帽所)
プロデュース:有限会社ナルナセバ

3. 農ガールとともにオール和紙系スーツ 金子みすゞ×柳井縞2014

デザイン/着装:水谷 由美子 糸制作:光成 明浩(備後撚糸株式会社)
織:石田 忠男(柳井縞の会長) アパレル・プロダクト:岡部 泰民(匠山泊代表)

■フィナーレ



スタッフ

総合ディレクター	水谷 由美子
作曲・音楽監督	田村 洋 (作曲家 山口県立大学名誉教授)
[ファッションショーの部]	
照明・舞台美術	矢野舞台美術
ステージング	REI・KO (リル・レイ・ダンススタジオ)
ヘアメイク	石井 貴子 (Family Takako 代表取締役) 井手 弓 (アシスタント)
	高橋千明・忠恵彩乃 (サロン・ド・エミール)
	海井美紀 (講師)・畑山美耶・高林里衣
	横山飛翔・横田大典・富岡未希 (東亜大学)
映像撮影	山口メディア研究所
写真撮影	OOMO Photograph.
MC	東房 由佳
舞台スタッフ	大牟田 樂子 馬場 裕之 村田 京香
画像作成	小川 大貴 石黒 あすか
グラフィックデザイン	村上 卓
運営スタッフ	水津 初美 甲斐 少夜子 小田 玲子 中濱 結香 荒木 麻耶
スタッフ	平櫛 祐佳梨 坂口 紗英子 黒田 祥歩 宮坂 莉穂
	井手 茜 下川まつゑ 森 かなえ 山崎 由絵

アグリアート・フェスティバル理事会・実行委員会

理事会

名誉理事長	安倍 昭恵	(内閣総理大臣 安倍晋三夫人)
理事長	江里 健輔	(公立大学法人山口県立大学 理事長)
理事	大谷 暢順	(ジャポニスム振興会 会長)
	大西 倉雄	(長門市長)
	村岡 富士夫	(NPO法人ゆや棚田景観保存会 理事長)
	永松 泰	(東後畑営農組合 代表)
	三村 建治	(東後畑自治会長)

実行委員会

実行委員長	水谷 由美子	(山口県立大学国際文化学部 教授)
実行委員	大谷 祥子	(ジャポニスム振興会 副会長)
	篠原 勝己	(安倍昭恵グループ)
	谷 査恵子	(安倍昭恵グループ)
	和田 一正	(NPO法人ゆや棚田景観保存会 理事)
	三村 フジエ	(東後畑食育グループ 代表)
	大西 基	(長門市企画政策課)
	岡村 安彦	(山口県萩県民局 長門駐在)
	松浦 奈津子	(一般社団法人おんなたちの古民家代表)
	水津 初美	(有限会社ナルナセバ 代表取締役)
	藤井 哲男	(会計担当: 公立大学法人山口県立大学事務局長)

協力

山口県立大学 (国際文化学部 グローバル人材育成推進事業) 安倍昭恵グループ
 NPO法人ゆや棚田景観保存会 東後畑営農組合・東後畑食育グループ 匠山泊
 NPO法人につぼんing協会 合資会社ロオーリング 柳井縞の会 玖珂縮みの会
 有限会社ナルナセバ 岡本染工場 有限会社桑田製帽所 備後擦糸株式会社
 農林水産省就農・女性課「農業女子プロジェクト事務局」 農事組合法人メロウランド
 山口ファッション&テキスタイル研究所Y-FATI 山口県立柳井商工高等学校
 北爪 裕子 田中 奈津子 伊藤 幸代 樫部 正樹 木村英太郎



PROFILES

■ トークショー



安倍 昭恵 [内閣総理大臣 安倍晋三夫人]

聖心女子専門学校英語科卒業。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科修了。株式会社電通 新聞局を経て、1987年安倍晋三氏と結婚。



大谷 暢順 [ジャポニスム振興会 会長]

本願寺維持財団理事長。東京大学文学部印度哲学科卒業後、ソルボンヌ高等学院卒業。パリ第7大学文学博士号取得。名古屋外国語大学名誉教授。

■ コンサート (レチスマック)



大谷 祥子 [ジャポニスム振興会 副会長 箏]

レチスマック主宰。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。古典邦楽のみならず、様々なジャンルのアーティストと共演、全国でコンサート活動を展開。



佐藤 まどか [バイオリン]

東京藝術大学附属音楽高校、同大学、同大学院博士後期課程修了。2005年シベリウスの研究で博士号(音楽)を取得。上野学園大学講師。



小松 玲子 [サヌカイト・パーカッション]

東京藝術大学管弦楽研究部非常勤講師を経て、現在、東邦音楽大学附属東邦第二高等学校講師、サヌカイトを中心にしたユニット「LUZAZUL」リーダー。



安田 正昭 [ピアノ]

東京藝術大学附属音楽高校、同大学を経て、パリ・エコールノルマル音楽院にてディプロマ取得、パリ国立高等音楽院で首席卒業。上野学園大学講師。

■ 農ガールコレクション



藤井 リナ [プロモデル]

株式会社ステラエンターテインメントのオーナーをつとめながら同社の所属モデル。雑誌「VIVI」をはじめ各雑誌を中心にモデル業とプロデューサー業を両立しアジア中心に活躍中。



木村 優 [KOKOkimデザイナー タレント]

世界で一番ピンクなクリエイター。ファッション雑誌の読者モデルでありクリエイターとしても活動する中その才能を認められ、外務省より原宿ファッション日本代表としてポップカルチャー発信使『カワイイ大使』に任命される。



KAMIJO [ヴィジュアル系ミュージシャン]

2007年春、Versaillesを結成し、デビュー作となるシングル「ASCENDEADMASTER」はオリコンウィークリーチャート8位を記録。World-Tourではヴィジュアル系バンド初となる南米7カ国公演を行った。

DAIHATSU もっと軽にできること。



Photo: エクストラ 4AT。ボディカラーはトニコオレンジメタリック (R71) (メーカーオプション)

山口ダイハツ

山口ダイハツ販売(株)

本社 / 下関市東大和町2丁目11-1 ☎083-267-1106
 ■営業時間 / 9:30~19:00 ■サービス受付 / 9:30~18:00

新型ハイゼットトラック誕生!

お仕事のニーズによって選べる業種別おすすめオプション

<p>漁業</p> <p>荷物の積み下ろしに便利な 基本形吊機(ベース車) ※選べる吊機(ベース車) (スタンダード吊機/ハイブリッド)</p>	<p>農業</p> <p>軽トラ専用車種に合わせた 「農業女子パック」 ※選べるオプション(ベース車) 仕事が終わるまで (農業女子パック)</p>	<p>建設業</p> <p>重たい荷物でも運べる 「スタイルシユパルク」 ※選べるオプション(ベース車) (スタイルシユパルク)</p>	<p>小売配送業</p> <p>1日1回以上配達するのにおすすめ 「軽トラパック」 ※選べるオプション(ベース車) 配達エリアが広がる (軽トラパック)</p>
---	---	---	---

多彩なカラーバリエーション!

ハイゼットトラック エクストラ 4500 **950,400円**

協力 **ダイハツ工業株式会社**



NPO法人
ふるさと山口経営者フォーラム

「NPO法人ふるさと山口経営者フォーラム」は、東京で活躍する山口県出身の経営者団体です。「故郷山口県の豊かな地域資源を、首都圏や海外にもっともっと広めたい。」私たちは、山口県の経済発展に寄与することを目的に、さまざまな活動を行っています。

NPO ふるさと山口

木村 英太郎

田中 奈津子

山口県立大学発 バンチャー企業

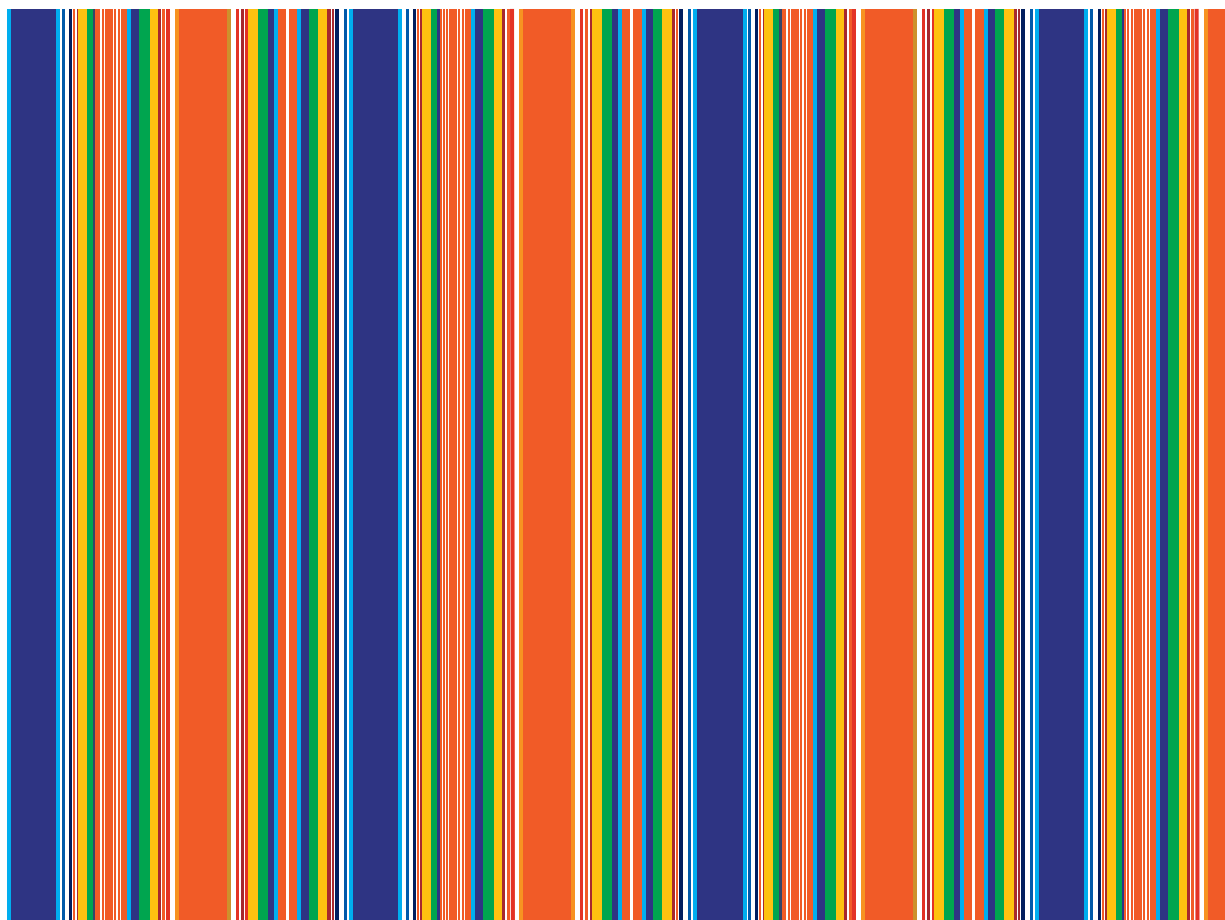


Naru Naxeve
レーベル mompekkko

アグリツーリズムや農作業体験のためのユニフォームとして、mompekkkoをレンタルします。舞台衣装、ダンス衣装および各種アパレルや小物の開発と販売。

2014年10月12日 山口県立大学企画デザイン研究室とのコラボレーションにより新レーベルmompekkko発表。
 1次産業から6次産業までの農業を視野に、作業着の開発やお米のパッケージデザインを行う。
 2014年11月1日 農林水産省就農・女性課農業女子プロジェクトと協働で、伊勢丹新宿店にてmompekkko紹介予定。

〒753-0093 山口市大殿大路246-1 電話 083-934-5566



同時開催 ロビー展示 & 販売 同日 13:00-18:00

- ジャポニスム振興会
- レチスマック (CD販売等)
- 山口ダイハツ販売株式会社
- 農林水産省 就農・女性課 農業女子プロジェクト
- Re 維新 by 山口商工会議所
- 山口の染織工芸 柳井縞の会 / 玖珂縮の会
- 山口県立柳井商工高等学校 柳井縞プロジェクトチーム
- 山口県立大学企画デザイン研究室×有限会社ナルナセバ&匠山泊&合資会社ロオーリング
- 長門市 自然栽培米等
- (パッケージデザイン by 企画デザイン研究室&東後畑自治会 with やまぐち縞 raita 2014)

ブーススタッフ 浅田 陽子・入江 幸江・松永 美代子
(山口ファッション&テキスタイル研究所 Y-FATI)

お問い合わせ先
アグリアート・フェスティバル2014 実行委員会事務局 山口県立大学内
〒753-8502 山口県山口市桜畠3-2-1 E-mail: myumiko@yamaguchi-pu.ac.jp
Tel: 083-928-3423 (学部長室)/ 083-928-2550 (企画デザイン研究室) 担当: 水谷 由美子

表紙 photo by Yumiko Mizutani

